河野健二編『資料フランス初期社会主義』

——二月革命とその思想——

坂本慶一

一

多くの場合そうであるように、これまで私が担当しえた書評はすべて著書についてであって、本書のような資料集を扱った経験は一度もない。案の上、いざペンを執る段になって勝手がちがうのにとまどう。それに、近年、私の研究関心は現代日本の農業問題にあり、かつて興味を抱いていたフランス初期社会主義思想の研究からはすっかり遠ざかっている。だから私は、本書の評者としてけっして適任者ではない。

それにもかかわらず、服部春彦氏を通じて本書の書評を依頼された時、ためらいながらも引受けてしまった——今となっては自らの軽率さに後悔しているのだが——のは、本書にたいして次のような期待感を抱き、そのうちどうしても取組まなければ、と考えていたからである。その期待とは、種々の事情で中絶を余儀なくされていた、そしていつかは再開したいとひそかに念願している十九世紀フランス社会思想の研究に、本書が大きなインパクトを与え、私の決心を促してくれそうな気がした、ということである。だから私の書評の動機は、研究以前の個人的事情によるものであり、差し当ってフランス初期社会主義についての深い問題関心によるものではない。こうした動機が本書の書評を的はずれのものにするのではないかと恐れる。

さて、二段組みで五〇〇ページに近い本書を通読し、二月革命を中心とするフランス初期社会主義の諸側面、あるいはその重層的な思想構造と多彩な思想内容のストレートな提示に、まったく目の開かれる思いがした。そこには、手際よくまとめられた概説書や、触りの良い引用文をつなぎ合わせた思想史の研究書には見られない、直截簡明なナマの思想の持つ独特の迫力が脈打っている。本書にたいする私の期待は満されてなお余りがある。今後、近代フランス社会思想に関心のある人はすべて、本書を無視して先へ進むことは許されないであろう。本書が十九世紀フランス社会思想研究のレベルを一段と高めることに寄与したことは疑いないからである。もちろん私自身、今後、いろいろの機会に本書を利用させてもらうことになるだろう。これだけまとまった資料集は、私の知るかぎりフランスでも出されていないからである。

以上が本書を一読しての私のおおざっぱな感想である。だが評者としての責めをこれだけではふさげそうもない。そこで、もう少し立入って本書の内容などについて触れることにしよう。

二

本書は全体として四つの大項目に分かれている。すなわち、Ⅰ「労働のミリュー」、Ⅱ「フランス社会主義の諸潮流」、Ⅲ「労働者の運動とアソシアシオニスム」、Ⅳ「二月革命」、がそれである。

各大項目は一、二、三……の中項目に、中項目はさらに1、2、3……の小項目に分かれている。大項目のプロローグとして、正確に二ページ分だけ、特にその時代背景にかかわる解説がなされている。各資料のテーマ（小項目）の冒頭にも、その資料の執筆者の経歴や執筆の動機、さらに資料の歴史的価値などについて六〇〇字前後の解説が付されている。これらの解説はいずれもたいへん要領がよく、読者にたいして、当時の社会・経済・思想・運動の動向について予備知識を与えつつ、さらに二月革命への歴史的興味をそそのかす役割を果たしている。

大項目から小項目にわたる各資料の分類・配列は、見れば見るほど体系的で、よく整理されているように思う。単独の資料のままではともすれば無味乾燥な事実と思想の羅列に陥る危険性を、本書は適切な分類と要を得た解説とによって見事に克服し、資料集でありながら体系的な著書の水準に接近することに成功している。編者の慧眼といったらよいだろうか。ともかく二月革命の問題性把握についての編者のすぐれた史眼に、ただ感服するのみである。

各資料とも、私の知るかぎり、すべて本邦初訳のものばかりであり、しかも日本語としても抵抗を感じさせない流暢な訳文となっている。訳出を担当された編者をはじめ、阪上孝、杉村和子、田中正人、谷川稔、谷口健治、富永茂樹、西川長夫、松田清、見市雅俊の各氏のご苦心に敬意を表したい。また、巻末の九ページにわたる「文献リスト」によって、本書のために編者らが収集、考証、選択した文献がいかに広範なものであるか、そのためにどれだけ多くのエネルギーが投入されたかが想像される。「まえがき」において編者は、「前後、三年にわたる悪戦苦闘の末、ようやく世に出ることとなったのが、この資料集である」とさり気なく書いているが、読者は「三年間の悪戦苦闘」がけっして誇張ではないことを承認するであろう。

ところで本書は、書名だけからはいかにも堅苦しい内容を思わせるが、通読してみて読み物としてもたいへん面白い記述があるのに気付いた。特にI「労働のミリュー」は当時の労働者たちの生態をまざまざと再現してくれる。彼らの衣食住生活や労働生活、労働者仲間の組織や日常の付合いなど、まことに興味津々たるものがある。仲間職人が路上で仁義を切るさいの口上など、比較社会学や比較文化論の資料として利用できそうな記録も数多く認められる。

II「フランス社会主義の諸潮流」は、サン＝シモン主義、カトリック社会主義、フーリエ派、イカリア共産主義、の四項目から成る。二月革命をめぐる思潮としては妥当な分類であるが、欲を言えば、ピエール・ルルーに代表され、ジョルジュ・サンドやヴィクトル・ユゴーらをも巻き込むロマン派社会主義（socialisme romantique）を問題にする必要はないだろうか。

III「労働者の運動とアソシアシオニスム」は、リヨン蜂起、労働者の運動と社会的共和主義、職人組合を越えて、協同組織と共産制、の四項目から成る。七月王政下の労働運動家たちが、口を開けば「アソシアシオン」を叫んでいたことがよくわかる。この語は、解説にもあるように、「二月革命前後における労働者の知的分子を魅了した呪術的な理念であった」ようだ。しかし、「アソシアシオン」とは何かということになると、必ずしも明確でない。訳語は一般に協同組織となっているが、情況によって協同組

合、生産協同組合、あるいは単に結合、協同などとされている。しかしこれは止むを得ないだろう。アソシアシオンは、思想・運動を異にする各党派によってさまざまの内容を与えられていたからである。そういう中で、編者による長文の解説「二月革命の思想的展開」でも指摘されているように、織布工シャルル・ノワレの見解が注目される。彼は、当時、アソシアシオンと同じほどに常用されていた「労働の組織化」を具体化したものがアソシアシオンであるとし、「部分的で専門的な協同組織」、「全般的協同組合」および「全国的協同組合」という、三つの段階を提示している。

Ⅳ「二月革命」は、情況、イデオローグたち、第二共和政の「社会主義」、労働者組織の試み、の四項目に分けられる。ここで特に注目されるのはルイ＝ナポレオンの「貧窮の絶滅」（一八四四年）である。この論文は、たしかに「官庁エコノミストの先駆者」（解説）を思わせるような、そつのない論理と実証的データとに基づいて展開されている。ここで初めて農業問題が扱われ、農業コロニーの建設によるフランス農業の再建案が提示されている。彼の農業コロニー案は、面白いことに、一八四八年四月のリュクサンブール委員会による「労働者のための政府委員会一般報告」にそのまま引き継がれている。「ナポレオン的観念」の勝利を裏付けるものであろう。

なお、この「一般報告」で名前が出てくるフランソワ・ヴィダルとコンスタンタン・ペクールの論文が本書のどこにも収録されていないのは惜しい。彼らの名前は、先にあげたルルーとともに「文献リスト」には記載されているから、おそらく「紙幅の上から」割愛されたものと思われる。

最後の資料「協同組合連合とフェミニズム」の中で、女教師ジャンヌ・ドゥロワンが、労働者の健康を害している原因の一つとして、食品添加物をあげているのは、いかにも女性らしい視点だと感心するとともに、食品公害に関する先駆的指摘ではないかと、たいへん興味深く思った。

三

大部の資料集を書評できるほど私は資料・文献の精通者ではないし、また二月革命をめぐる思想や運動、あるいは当時の政治や経済の動向について、現在、深い研究を進めている者でもない。ただわずかに、かつてフランス社会主義思想について若干の論文を書いた記憶を持つ者に過ぎない。だから本稿は、評者として不適任であることを承知の上で、いわば私自身の見聞を広げるつもりで読んだ書物の感想文を綴ったにとどまる。しかし、私自身としては、少なくとも本書を読了しえたことによるある種の満足感にひたっている。こういう満足感を与えてくれた本書に感謝しつつ、最初に述べた本書の読後感をもう一度くり返すことを許していただきたい。

本書は、単なる資料集としての存在を越えて、フランス初期社会主義の研究に一つの画期を印づける書物である。今後の研究は、実証的にも理論的にも本書をふまえた上で進めざるをえないであろう。生命力のある書物が世に出たことを、広く読者とともに喜びたい。

（A5判　四九〇頁　一九七九年一一月　平凡社　七〇〇〇円）

（京都大学農学部教授　　）